

## ◆ ニュースレター おおば ◆

平成28年4月号

## テーマ

## 『老後崩壊・「老人喰い」と若者』

○：現代思想（青土社）2月号で「老後崩壊」の特集をやっていた。「下流老人」を生み出す社会の貧困に抗して―藤田孝典・春日キスヨ、無届施設のリアルが投げかけるもの―天田城介、ひとり暮らし高齢者の貧困と社会的孤立―河合克義、「アカルイ老後生活」のための制度再設計は可能か―岩田正美、「下流老人」の中核としての貧困高齢女性―竹信三恵子、介護ビジネスが招いたツケにどう立ち向かうべきか―長岡美代、認知症の精神療法―北中淳子、障害者介護保障運動と高齢者介護の現状―渡邊琢、「わたしたち」が、「老後」を物語るために、「今」できることについて、考えてみた。―アサダワタル、等々、様々な視点から専門家が考察している。

○：その中で気になったのが、世代闘争へ？―生態社会学で考える高齢社会のゆくえ―と題する山下祐介氏の論文だ。高齢社会問題

とは、単に高齢者の数や比率が増えるのではなく、第一次ベビーブームで生まれた団塊の世代が、それ以前の世代と比べても、それ以後の世代と比べても、群を抜いて多いことに伴う問題である、という認識からスタートする。団塊の世代は、長男は親元に残り長子相続とセットで親世代を扶養し、次男以下は高度経済成長の中で自力で自分の生きる道を切り拓いてきた。家からも地域からも自由の中で、団塊世代自身の扶養をその下の世代に期待しないかわりに、老後も自分で自分の面倒をみることになる。「自分のことは自分で守る」が、社会として生活保護など様々なセーフティネットをしつかり用意し、お互い助け合いましたよ、になればいいのだが、むしろセーフティネットに引っかかることを回避しようと各自で自衛に専念する方向に進んでいる。自衛は、実際には「カネを貯め込む」とい

う形で追求される。本来、流出し、消費されて、世間に戻っていくはずの財が各自に隠匿されてしまう。これは続く世代にとっては苛立らしいことだ。

○：2000年代は、第二次ベビーブーム世代にとっては、家族形成期にあたる大事な時期だった。しかし子育ての終わった世代が自らの老後のために財を蓄え始め、経済の停滞が始まった。本来、財が滞らず市場に回わり、経済が健全である限り、将来展望にも期待を持ち、若い人々の結婚や子育てへの投資も生まれてくる。そうならなかった、この蓄財を、続く世代はどう感じるか。

○：「自分のことは自分で守る」一見、清潔な態度は、実際には「自分たちは自分たちでやるから、次世代は次世代で考えろ」であり、ある世代の自己保身が、次の世代の健全な再生産を破壊した、そう解釈される事態を引き起こした可

能性がある、と山下氏は指摘し、団塊ジュニア世代以降がこれから守ろうという高齢者はこうした人々であり、かなり厄介な事態だという。今は団塊世代は健康であり、財産も持っており、数も多いから世論でも選挙でも大勢を握り、世代闘争において優位にいる。しかし、人は必ず老いる。やがては若い人に権力を奪われる。抑えられていた不満に火がついた時、世代闘争は顕在化する。

○：同時に2000年代は改革の時期でもあった。改革の思惑はどうあれ、既存の財や権益を守るため、国家としての体制をこれままで通りに維持するため、現在の機構をスリム化し、その柱を維持することを優先する。そして新しく参入する若い世代には、これまでのようなことは認めない。時代は変わったのだから、生き方を変えてもらわなければならない。2000年代改革で達成しようとした

のは結局はそういうことだった、として山下氏はさらに論を進めている。

○：私も昭和24年生まれ、団塊世代の一員として考えさせられる。財を蓄える状況には全くないが、今の世の中を見ると、我々は間違ったのか、精一杯生きてきたはずなのに、間違ったのか、間違ったとしたら、いつから間違ってきたのか、それは修正できるのか、と思わざるを得ない。

○：現代思想の特集で、もうひとつ気になったのが、鈴木大介「与える世の中」をつくるために「オレオレ詐欺」とか「振り込め詐欺」とかに関わる若者達をはじめ裏社会・触法少年少女らの生きる現場を中心とした取材をするルポライターの寄稿だ。

○：興味がわいて鈴木氏の著作「老人喰い―高齢者を狙う詐欺の正体」ちくま新書を読んだ。高齢者を騙すために高度に合理化され

た組織、ターゲットを見つける名簿や手順、高いモチベーションを植え付ける研修、プレイヤーと呼ばれる若者達の実像などなど、想像を超える現実を見せつけられる。被害の報道を見るたびに、これだけ注意するよう騒がれているのに何で引つかかるのだろう、とか、お金持ってる高齢者がいるんだ、とか思ってきたが、この本を読むと、これは無くならない、まだまだ続くと感じる。

○：もちろん犯罪であり、肯定できるものではないが、最貧困にあえぐ若者達を生み出しているのもこの社会だ。現代思想の鈴木氏の寄稿に戻るが、高齢者が「自分たちは汗水たらして働いて資産を作ってきたのだ」と主張しても、若者達は「僕らの世代は汗水たらして努力してもそんな資産形成をすることはできない」と反駁し、「豊かな高齢者世代」に対しての怨嗟感情、そして明確な「被害者

感情」が見てとれるという。彼らにも自らの祖父母らに対する敬老精神は感じられるのに、現在の日本で豊かさの大半を牛耳っていると思われる高齢者は全く別の存在として感じられているようだ、という。それはなぜか。昨今「格差社会」が進行していると言われる日本は、はるか昔から格差社会、むしろ階層社会、階級社会だった、ということだと鈴木氏は分析する。

○：「日本は不思議だ。僕の国なら不用意に大金を抱え込んでいる老人がいたら、殺して金を奪うかもしれない。でも中国では金を持った老人はみんな商売を始めて若者を使う。こき使うかもしれないけど、少なくともお金を下の世代のために使う」と取材した不良中国人が言ったという。高齢者社会も格差社会であり、下流老人と呼ばれ将来不安の中にいる老人も多いが、若い世代には見えづらい。世代間格差と階級間格差は本来、

別のもののはずだが、それを混同し、境目すらつかなくなるほど、若い世代の閉塞感や将来への無力感は大い。

○：鈴木氏は、若い世代、子育て世代などに「与える世の中」にして行く。努力に応じて必ず報われる世の中にして行くことを最優先課題にすべきだと主張する。それが将来を委ねることになる世代全体(それこそ40代以上すべて)にやれる最善の「保険」であり、「将来投資」ひいては「自己防衛」ではないのか、と問いかける。

○：老後崩壊を問題にする時、老人を被害者として見がちだ。だが自分たちが作ってきた状況でもある。高齢者問題は日本だけの問題ではない。しかし日本がテストケースに見られている。それをモデルケースだと言えるように対処できるのだろうか。一人ひとりが持つ家族に対する愛情を、同じように若い世代へ、そして地域も、

国(政治家・官僚)も、同じように若い世代へ愛情をふりそそげば難しくはないはずだが…。